

VARÓN DE DIOS

(神の人)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
九州教区 壮年部 2022年12月

主の御名を賛美します。

12月になった途端に、これまでの暖かった気候が一変し、霜の降りる朝もありますが、九州教区の壮年部の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

今年は2月のロシアのウクライナ侵攻、それに伴うエネルギー価格の高騰、コロナ感染、急激な円安、元首相の銃撃による死亡と、それに関連した旧統一教会の問題など、重苦しいニュースが国内外共に続きました。1970年代末に「不確実性の時代」と言うことばが流行しましたが、今はまさにその再来の様相です。

このような時にこそ、永遠に変わらない真理である「聖書 神のことば」が求められると思います。

今回は熊本市にある「希望が丘キリスト教会」の二人の壮年部員の方の証を掲載いたします。最初に希望が丘キリスト教会の紹介です。

教会は1972年8月に野副陽二夫妻が楠団地に移転した時から始まります。

野副師は会社務めをしながらアーサー・グリエル宣教師と共に伝道をされ、現在の会堂は1979年、



アーサー師を通しての海外からの援助により建築されました。1981年荒井孝喜師家族が着任し、同時に教団加入、名前を『希望ヶ丘教会』と改称されます。

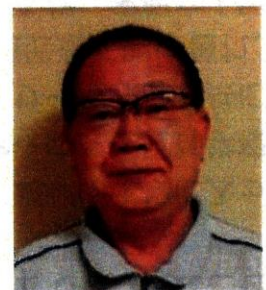
その後教職は本田勝宏師・敬子師（現中央聖書教会）、大谷浩嗣師（現甲子園伝道所）、そして2008年4月に本堀秀一師・多嘉子師が着任して、現在に至っています。

「主は全てお見通し」

廣石 茂雄

最初、本堀牧師よりお話を頂いた時は、二つ返事で簡単に受けましたが、果たして私に出来るだろうか、私の話で務まるだろうか、日に日に後悔の気持ちが強くなり、お断りをしようと思いましたが、その時ふと、主は全てお見通し、そして主は全て計画のうで見守ってくださるということを思い出しました。勇気を出して、これまでの悔い改め、これからの主との交わり、信仰生活について書いてみようと思いました。

実は私は、40代の頃、家族や周囲の方々を巻き込んだ大きな罪を犯してしまいました。長年お付き合いしてきた方々が、一人、また一人といなくなっていく中、私を見捨てることなくずっと側にいてくれた妻がクリスチャンでした。どん底の状態になって、やっと聞く耳を持つことができた私に、少しずつ少しずつ、神様のこと、イエス様の十字架の贖いのことなどを、私に教えてくれました。神様は、心から悪いことを告白し、悔い改めて祈るなら、赦して下さいと聞き、都合が良いようですが、そ



のことを信じました。少しずつ礼拝出席をするようになり、当時大変ご迷惑をおかけし、また大変お世話になりました本田牧師より導いて頂き、洗礼を受けました。今でも毎週ではありませんが、礼拝に出席し、祈りをしています。

最近、時間はかかりましたが、ほぼ問題の処理が終わりました。助け手として備えて頂いた友人、親戚、家族、特に私を神様へと導いてくれた妻に感謝です。また何よりも忍耐して、赦して下さった神様の愛に感謝します。この証を機に、礼拝に出席し、主との交わりを深めていけたらと思います。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

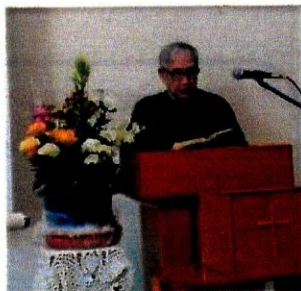
ローマ5章8節



「壮年～老年」

野副信三郎

六人兄弟の三男坊として生まれ、信三郎（両親が信仰に入って三年目に生まれ、上から三番目）。若い頃は自分の名前が恥ずかしかったが、今ではこの名前を誇りに思っ



ている。

男五人女一人、父は福岡県直方市で、工員十名くらいの印刷業を営んでいた。昔の大家族は当たり前で珍しくはなかった。学校に行っても、今みたいなじめもなかった。当時は食糧も少なく、主食は配給制度で腹いっぱい食べられなかった。

お金があっても物がなく、現在ではスーパーでは何でも売っている。『贅沢は敵だ!』の時代でもあった。やがて第二次大戦が始まり、教会も軍の規制により、宣教師、牧師も普通の仕事で働いて、家族も養っていたので家庭集会が多かった。

その中で、戦時中に長男が中学一年で病气（肺炎）で召天した。天が間近になり、神様が花の籠をもって迎えに来られる夢をみたことと、天国は素晴らしいところ、死んだ際は自分は何処に行くかをはっきり示していた。最後は『終り、終り』と言って息を引き取った。母は我が子の信仰の立派さに、頭を何回も撫でてやったことを話していた。

次男陽二は、戦時中に海軍の学校に入っ

てすぐ終戦になり、大学—中央聖書神学校、牧師になり、地元でアーサー宣教師と共に、牛深～本渡～熊本と開拓伝道に明け暮れ、風邪～白血病で召天（45歳、家族六人残す）。召天前に家族、私に、『自分の命は長くないが、今気がかりな事がある。葬式の時に一番下の息子（与志也）の着る服がないので、買ってきてほしい。それと聖餐式のぶどう酒も注文し、デパートに直行し買い物中に店内放送で呼び出され、今兄が息を引き取り、天国へ旅立ったことを知らされ、熊大（第二内科）に急いで、すぐ兄と対面し、ぶどう酒を口に注いで、約束の品を届ける。自分の葬式の指示まで…兄貴らしいと感じた次第です。

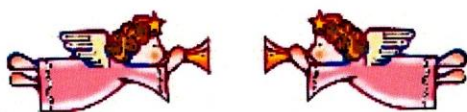
私の母も私達の結婚後、兄の教会伝道を手伝いながら、孫達に囲まれ生活中、ある時体を壊し（子宮がん・胃がん）手遅れ状態で、一番下の娘が北九州（市の保健婦）、母の看病のため通い、母の働きにより、私たち兄弟は非常に助かり、母の信仰はすでに自分がかんと知り、召されることを夢に見、天国の素晴らしく、私達が見舞いに行っても、天国の話。「先に行ってるから必ず来てね！」何度も言っていた。

又教会の出席、どんな苦しい時にも、献金、什一は厳しかった。祈りの母でもあった。詩篇23篇をいつも口ずさんでいた。聖歌、歌いつつ歩まんも歌っていた。（聖歌498）

第一テモテ6章～私達は何一つ持ってこなかった。又何一つ持って出ることはできません。衣食住があれば満足すべきです。ヨブ1章～私は裸で母の胎から出てきた。又裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

クリスチャン家庭に生まれ育ったことは本当に感謝しています。人生は何が起るかわかりません。私達はいつ召されても、心の準備が必要で、天国行きの切符を用意しておきましょう。私達の国籍は天国にあります。

野副家の財産は残らなかったが、信仰という目に見えない財産が残っている（借金もなし）



編集後記

もうすぐクリスマスです。旧約聖書の中には、いつ頃、どこで生まれ、どのように生き、どのように死なれるかというキリストに関する預言が350ほどもあるそうです。その中の一つ、イザヤ書9章6節のみ言葉です。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

イザヤはBC700年代に活躍した預言者で、北王国イスラエルがアッシリヤに捕囚になった頃です。その後BC585年には南王国ユダがバビロンに捕囚になり、また預言者マラキ以後キリストの誕生までの約400年間は、神のことが与えられない、いわゆる「暗黒時代」が続きました。

そのような中でも、「救い主キリストが与えられる」という信仰は消えることなく、イザヤの預言から700年以上も後の、シメオンやアンナにも受け継がれ、今私たちは再びイエス様がこの地上に来て下さる再臨を待ち望んでいます。

聖書は預言の書です。しかもその預言はイエス様にあって全て成就しました。もちろんこれから起ることも書かれています。機関誌の最初の所に「今は不確実性の時代である」と書きましたが、神を信じる者にとっては、「確実性の時代」です。

広報誌の名前は「**VARON DE DIOS**」（バロン デ ディオス）です。これはスペイン語で「**神の人**」という意味です。

九州教区 壮年部担当 松尾 敬文
福岡市東区水谷 1-14-3
福岡キリスト教会 092-681-5501